



ひと手間をかける

本年度、「管理職がより主体的にかかわり、他機関と協力・連携を図りながら事案に対応していく」ということを、本校の努力点のひとつにしています。これまでの経験上、ことが起こった際に適切に処理していくためには、やはり管理職自身が主体的にかかわることが第一条件だと考えているからです。

1件の重症事故の背景には、29件の軽傷の事故と300件の傷害にいたらない事故があり、事故の背景には必ず数多くの前触れがあるということを数値で表したのがハインリッヒの法則(※注1)。また、メラビアンの法則(※注2)とは、話し手が聞き手に与える情報の影響力を、言語情報…7%、聴覚情報…38%、視覚情報…55%であると導き

No Image

No Image

出したものです。自身これまでの研修会等で何度も耳にしており、言いかえ妙であるこの二つの法則のことをご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし現実、『今度も前と同様、大丈夫だろう』とか、『これぐらいですませても心配ないだろう』とか、日々の忙しさを理由に根拠のない自信をもとに判断し、うまくいかなかったこともありました。ゆえに自身を戒める意味においても、上記のことを努力点に明記したとも言えるでしょう。

先日、職員の研修会にて、少年センターの方に学校現場における情報モラルについてのお話をさせていただきました。本校児童の実態から考えて、昨年度のPTA役員を対象にした研修に続いて来校していただきました。パソコンやスマートフォン等を使って情報を発信・受信する際の様々な問題については、使っている児童とともにそれらを与える大人の意識にも問題があり、本校もまた例外ではありません。少年センターの方によると、和歌山市内においても、わが子がトラブルに巻き込まれたり被害にあったりして、思い悩んだ末に相談に来る方もいるとのこと。『うちの子にかぎって』という思いは、これもまた根拠のない自信だったかもしれません。

何れにしても「ひと手間かける」ことが肝要であり、それを怠れば結局は自分に返ってくるという現実は、学校でも家庭でも同様と言えるのではないのでしょうか。

※注1⇒分かりやすく言うと、ヒヤリとしたりハッとしたり、そんなことが多々続いているうちに次はドキッ! そしてドキッ!の記憶が薄れたところに大きなことが…ということ。

※注2⇒伝える手段として、内容や言葉とともに目からの情報が一番大切だということ。ややこしい話やこみいった話は、会って顔を見て進めることが一番ということ。

(今回は、10月の少年センターだよりに掲載された内容を、加筆・追加したものです)